

『一刀齋先生剣法書』訳注及びスポーツ教育的視点からの考察 (3)

竹 田 隆 一
教育学部 生涯スポーツ講座
長 尾 直 茂
教育学部 国語教育講座
(平成16年10月1日受理)

承 前

研究の目的・意図等については前稿である(1)(2)(『山形大学紀要(教育科学)』第13巻・第2,3号所収。2003年2月及び2004年2月刊)の冒頭に記したので、ここに贅言を重ねることはしない。ただし、凡例のみは便宜上、今一度載せることとした。今回は第11章から最後の第16章までの5章を取り扱う。

凡 例

- ◎訳注の底本には、今村嘉雄『日本武道大系』第二巻・剣術(2)(同朋舎, 1982)に収録された、京都鈴鹿家所蔵本『一刀齋先生剣法書』を用いた。但し、句読点は適宜に改めた箇所がある。また、参考資料として杉浦正森『唯心一刀流太刀之巻』を用いたが、これも『日本武道大系』第二巻所収のテキストに拠る。ちなみに『一刀齋先生剣法書』は寛文四年(1664)に、『唯心一刀流太刀之巻』は天明三年(1783)に稿成ったものである。
- ◎本書は16章から成るが、これを適宜に段落に分ち、そこに語注、現代語訳、そして必要に応じて補説を加えた。
- ◎語注は長尾が担当し、補説は竹田が担当した。現代語訳は両者で検討、吟味した上、ここに掲出した。なお、抄訳ではあるが、本書の現代語訳を試みたものに、吉田豊『武道秘伝書』(徳間書店, 1968)があり、適宜に参照した。

第 11 章

(1)

勝負の要は、間^まなり。我利せんと欲するは、渠^{かれ}も利せんと欲す。我往んとすれば、渠^{かれ}又来る。勝負の肝要、^{この}此間にあり。故に我^{わが}伝の間^{まづも}積りと云ふは、位、拍子^{うか}に乘ずるを以て間^まと云也。敵に向て、其間に一毛を不容^い(容れず)、其危亡を不顧(顧みず)、速に其利

に乗じて殺活の当的能奪⁴⁾の本位に可至（至るべき）者也。若し一心の間に止る則^{ととき}は変を失す。我心、間に拘ざる時は、間は明白にして其位に在り。故に心に間を止めず、間に心を止めず、能く水月の位⁵⁾に至るべき者也。無理無事の一位を水月の本心と云也。故に求めば、是^{これ}水月にあらず。一心清静にして曇りなき則^{ととき}は、万方⁶⁾皆水月なり。不至（至らず）と云所なし。

【語注】

- 1) 渠…三人称の代名詞。「彼」に同じ。
- 2) 拍子…杉浦正森『唯心一刀流太刀之巻』中の「剣，体，色，勢，拍子之事」の条では、「拍子には品々あり。諸家に沙汰する如く，拍子，無拍子と云。又無拍子の拍子と云。或は不合の拍子などと云。亦離るる拍子と云。是皆自他ともに巧者の上の説なり。諸説のあしきに非ず。されども当流に近く説ときは，畢竟自然の威勢，天然の拍子なり」（p290）と説明する。よって，拍子は剣や体の修練によって得られる自然な威勢，あるいはそのような威勢によって生ずる，その人独自の自然な調子・リズムと解釈できよう。
- 3) 間…本書にいう「間」は，現在いうところの相手との距離，つまり「間合い」の意だけではなく，俗に間がよい，わるいというような，いわゆる「調子」・「タイミング」の意をも含むようである。そのため「間」を説明するに際して，拍子（リズム）という言葉が用いられるのであろう。しかし本書では「間積り（間のとり方）」に拍子が必要な要素であることをいはいはしても，それよりも位が大切であることを主張する。なお吉田豊『武道秘伝書』では，この箇所を「わが流儀における間とは，互いの力関係，戦いのリズム，テンポを有利に変えてゆくことをその内容としている」（p128）とし，本稿の解釈とは異なる立場を採る。ただし，「間」を単純に「間合い」の意としない点は本稿と軌を一にし，吉田が【解説】で「ここにいる間とは，単なる距離間隔のことではない。敵とわれとの空間的，時間的關係すべてが含まれている」（同前）と述べることは参考となる。
- 4) 当的能奪…「当的」は，「的に当たる」と訓読し，相手^{まへ}を的として，それに向かう意。『唯心一刀流太刀之巻』中の「先後当的之事」（p289）によれば，自己を敵的とし，敵を自己の的とするという，相手と縁を切らぬ敵対関係にある状態をいう。加えて，「而も的をはなれて自由をなす。爰をさして殺活の一的とも云べし」とも述べており，以上から考えるに本書のいう「殺活の当的」は，的に向かいながらも，その状態から離れた自由な境地と解される。「能奪」は，やや解し難い。文脈からすれば「与奪」の意と考えられる。
- 5) 水月の位…本書第五章に詳しい。また第六章にも若干の言及がある。
- 6) 万方…万国，万民，あらゆる道・方法など，いくつかの意味があるが，ここでは「全てにおいて」の意と解した。

【現代語訳】

勝負のポイントは，間にある。自分が利を得ようとするれば，相手もまた利を得ようとする。自分が（打って）ゆこうとするれば，相手もまた（打って）来る。勝負の大切なポイントは，

この間というものにある。よってわが流派の間というものは、位が拍子にまさった状態をもって間というのである。敵に向かって、その間に一毛をも入れず、その危険をも顧みず、すぐさま利点に乗り、相手に応じて生かすも殺すも自由な位に至るのである。もしも心が間にとられる時は変化はできない。自らの心が間にこだわらない時は、間は明白なものとして、その（あるべき正当な）位にあるのである。よって心に間をとどめず、間に心をとどめず、水月の位に至ることができるようにすべきである。道理もなく技もないという位を水月の本心というのである。だから（そこに到達したいと）求めるのであれば、それは水月（の位）ではない。心が明らかに静かに、曇り一つない時は、すべてがみな水月である。（そうすると）たどりつけない所はないのである。

【補説】

ここでは、剣道の技において重要な概念である「間」¹⁾、「拍子」²⁾、「位」³⁾について述べられている。いずれも多く多くの伝書に登場する語句であるが、今後一層の概念の明確化が望まれるものである。

1) 「間」は多くの武芸伝書で指摘される重要な概念である。財団法人全日本剣道連盟 編『剣道 和英辞典』(2001)では、「間」を「物と物のあいだ、事と事のあいだ、時間と時間のあいだなどのこと。時間や空間を意識させる重要かつ特殊な概念およびそれを表現することば。剣道において「間」といった場合は、どちらかといえば時間意識でとらえ、「間合い」といった場合は、空間・距離意識でとらえているというように一応区別している。さらに、それらの時間的・空間的な間を適切にはかたり、つくったりすることを「間積もり」という。』(同前, p59)とし、「間合い」を「相手との空間的距離。相手とのへだたり。間合いのとり方は相手との関係により微妙であり、かつ大事なものである。』(同前)としている。「間」と「間合い」は区別されていることがわかるが、ここで使用される「間」は、時間的意識と空間・距離意識を内包するものであるといえる。

2) 「拍子」は、「竹刀や体さばきなどの動きの流れやリズム。また、相手と呼吸を合わせたり外したりするなど、相手と自分の気持ちのかけあいをいう場合もある。』(同前, p35)と示される。スポーツ運動学では類似概念として運動リズムという概念がある。運動リズムは、「運動リズムとはある運動の力動的構造であり、すなわち、ひとつの運動の根底に横たわっている緊張と解緊の周期的交替と理解する。……投げることや跳ぶことにも緊張と解緊の特徴的交替が示されるのである。運動リズムはしばしば視覚的に、聴覚的にきわめてはっきりととらえられる現象として出現するものである。』(クルト・マイネル著、金子明友訳(1981)：マイネル・スポーツ運動学、大修館書店、p168)と示されるものである。呼吸なども身体における緊張と解緊の周期的交替ととらえれば、運動リズムと拍子は非常に近い概念といえる。

3) 「位」は、「ものの等級や優劣。人格と実力を兼ね備えた度合い。相手と対峙したときに生ずる精神面や技術面の格差。この位は稽古を積むことによって得られた自信から自然に高められていくものである。』(同前, p57)と示されている。「間積もり」においては、「拍子」よりも「位」が優先するということは、「拍子」が技術的な習熟を意味するのに対し、「位」は技術的・精神的習熟の等級を意味するものであり、修練による相手に動じない心の持ちようとか、技への自信などの精神的充実が関与することに因るものといえる。

(2)

古語曰、遠不慮則必在近憂¹⁾(遠きを慮らざれば則ち必ず近き憂ひ在り)と。故に間に遠近の差別なく、其間を不守、其変を不待、人に致されずして疾く其位を取るは、当伝の一的²⁾也。若それ血気に乗じて無二落着する³⁾者は、我が刃を以て独り身を害するが如し。

【語注】

- 1) 遠不慮則必在近憂…『論語』衛靈公篇の「無遠慮、必有近憂(遠き慮り無ければ、必ず近き憂ひ有り)」にちなむ。先々までの配慮がなければ、必ずや身近で心配事が起こるという意味。ここでは「備えあれば憂えなし」の意で用いる。
- 2) 的…ここでは、目的あるいは目指すところの意と解した。
- 3) 無二落着する…吉田豊『武道秘伝書』の用いるテキストは、この箇所を「無に落差する」と記し(p127)、吉田は「この心得を忘れる」と解釈する。本稿では京都鈴鹿家所蔵本の記す通り「無二落着」として理解し、「ひたすらに解決しようとする」の意と解釈する。

【現代語訳】

古語にいう、「先々までの配慮がなければ、必ずや身近で心配事が起こる」と。よって間に遠近の区別はなく、相手との間こだわるのでなく、相手の変化を待つのでなく、人に仕掛けられる前に素早く(あるべき正当な)位に立つことは、当流派の一つの目指すところである。もしも血気にはやることで、ひたすらに解決しようとする者は、自分の刃で自分の身を傷つけるようなものである。

第 12 章

敵の事を以て我事とし、敵の理を以て我利¹⁾とす。是鸚鵡の位²⁾と云なり。強を強く、弱を弱く、撃つ者を撃ち³⁾、突く者を突く。千変の利、何れも如此(此の如し)。是を敵の事に向ふと云也。強を弱く、弱を強く、打つ者を請け、請る者をばはづす。万化の利、何れも如此(此の如し)。是を敵の理に随ふと云也。実を以て来る者には実を以て向ひ、虚を以て来る者には虚を以て随ひ、敵能して能せざる事を示す時は、我も又能して不能(能せざる)事を示す者也。

【語注】

- 1) 利…ここでは「理」の意と解する。吉田豊『武道秘伝書』の用いるテキストは、「敵の利を以て我利とす」に作る。
- 2) 鸚鵡の位…いわゆる「鸚鵡返し」の位である。本書では、この鸚鵡返しにも二つがあるといい、一つは敵の技に同じ技で向き合う、いわゆる「相の技」であり、もう一つは敵の道理にしたがってその裏をかく、いわゆる「応じ技」である。
- 3) 撃つ者を撃ち…吉田豊『武道秘伝書』の用いるテキストは、これ以降、文辞が大きく異なるので、参照されたい(p129)。

【現代語訳】

敵の（用いる）技を自分の技として用い、敵の（用いる）道理を自分の道理として用いる。これを鸚鵡の位というのである。（敵が）強く来る際には強く、弱く来る際には弱く、撃ちかかって来る者には撃ちこみ、突いて来る者には突く。千変の利とは、すべてこのようなものである。これを敵の技に向き合う（鸚鵡の位）というのである。（敵が）強く来る際には弱く、弱く来る際には強く、打ちかかって来る者を受け、受けようとする者の裏をかく。万化の利とは、すべてこのようなものである。これを敵の道理にしたがう（鸚鵡の位）というのである。実を以てかかって来る者には実で以て向い、虚を以てかかって来る者には虚で以て応じ、敵が十分に力がありながらも力がないように見せかける時は、自分もまた力があっても力がないように見せかけるのである。

【補説】

敵に対する対応の運動様相を論じたものである。対応には千変の利と万化の利の二通りがあり、千変の利とは、敵と同じ対応であり、万化の利とは敵と反する対応であると示している。このような対応の運動を鸚鵡とたとえることは指導言語として非常にわかりやすく、運動の円滑な遂行につながるのではないか。

第 13 章

(1)

術は、実¹⁾を備て虚に変じ、虚を示して実に転ず。敵に向ふ時、愚にして先づ負るは謀の利也。誠に兵者詭道也と孫子²⁾も云り。故に一偏に是を心得る者は、敵に因て転化する事能はざる者なり。一剣一理を主とする³⁾則^とは、一心不変の位に備る。是を思無邪⁴⁾と云。前に書するが如く⁵⁾、術の至極也。是を単刀と云なり。単刀は敵の無形無色を討ち、事理未発已然⁶⁾を全く勝つ、事の高上也。されば、太公⁷⁾の曰、兵勝術、密察敵人機、速乘其利亦疾打其不意（兵勝の術、密に敵人の機を察し、速かに其の利に乘じ亦た疾かに其の不意を打つ）と。

【語注】

- 1) 実…「実」と「虚」については、第6章の第4節などで定義がなされる。参照されたい。
- 2) 孫子…『孫子』始計篇の言葉。
- 3) 一剣一理を主とする…我が剣・理を恃んで、一心不乱にかかることをいう。『唯心一刀流太刀之巻』中の「主一剣一理之事」(p291)は、「我に応ずる所の一術を主とし、余念なく思慮分別を起さず、一心不乱にして勝を疑はざるを主一無適と云ふ也」と説明する。
- 4) 思無邪…『論語』為政篇の言葉。
- 5) 前に書するが如く…第2章の第3節にいう「無形の構」あたりを指すか。
- 6) 已然…「以前」の意と解す。
- 7) 太公…祖父、あるいは父をいう。祖父であれば古藤田勘解由左衛門俊直を指し、父で

あれば古藤田仁右衛門俊重を指す。

【現代語訳】

術は、実の状態にありながら虚の状態に変化し、虚の状態を示しておいて実の状態に変化する。敵に向かった時に、愚かにふるまって先ず負けることが、計略においては利を生じさせることもある。たしかに「兵法は人をあざむくことである」と孫子が述べた通りである。よって一つに偏ったものとして是(=兵法)を心得る者は、敵に応じて変化することができない者である。一つの剣、一つの理を主とする際には、一心不変の位が身に備わる。これを「心に邪な気持ちがない」状態という。前に書いた通り、(この状態が)術の最高到達点である。これを単刀というのである。単刀とは、敵が形も色もなさぬ状態を討ち、事理も未だ発せざる以前を(攻めて)完全な勝利を得るといふ、技の最高のものである。そうであるので、太公はいわれた、「兵法として勝つための術は、密かに敵の動きの機を察し、すばやく有利に乗じ、また敵の不意を打つことである」と。

【補説】

剣道の世界では、古来に使用されながら現代では使用されなくなったり、意味が違って使用されたりする語句がある。単刀もそのような語句であろう。敵の未発を打つという意味の単刀は、「相手と相対し勝敗を争うとき、相手の起こりをいちやく機微の間に認めて、直ちに打ち込み、機先を制することをいう。」(財団法人全日本剣道連盟編(2001): 剣道 和英辞典, p63)と示される現代剣道における「先々の先」を意味するものといえる。

(2)

当流の剣法を学ぶ者は、此理を能く観じ、其法を学び修行する^{とき}則は、術の高下によらず自己相応の道理を得る者也。たとへ事に功ありといえども、心実¹⁾の理なきものは勝利を得がたし。事不功たりといへども、心実を以て是を学ぶものは、勝利を得る事、何の疑かあらん。誠に此術は、士の一芸、勇者の具足²⁾なり。故に我其实を撰て之を伝ふ。学ぶ者、謹んで是を秘するは、士の実なり。目前の事を山のあなたと示すは、術の掟なり。

【語注】

- 1) 心実…心に真心を有する。あるいは、真心。
- 2) 具足…甲冑。

【現代語訳】

当流の剣法を学ぶ者は、この理屈をよく考え、その技法を学んで修行すれば、術の高い低いに関係なく自己相応の道理を手に入れることができる。たとえ技においてすぐれていても、真心という道理を持たぬものは勝利を手に入れることはできない。技がすぐれていなくとも、真心で是(=剣法)を学ぶ者が、勝利を手に入れることに、何の疑いがあるのか。ほんとうにこの(当流の)術は、武士の一芸、勇者の具足のようなものである。よって私は真心のある者を選んで、これ(=当流の術)を伝えている。学ぶ者が、これ(=当流の術)をつつしみ隠すのは、武士としての真心である。目前の事であっても山のむこうだと

人に示す（ように秘して表に出さぬ）のは、術を学ぶ際の掟である。

【補説】

真心は剣術を学ぶための心構えとしての精神性であり、剣術の稽古を通して得られる精神性ではなく、技術学習において望まれるべき精神性といえる。

第 14 章

事の利と云は、我一を以て敵の二に³応ずる所也。譬ば打ちて請け¹⁾、外して切る、是れ一を以て二に³応ずる事也。請けて打ち、外して切るは、一は一、二は二に³応ずる事也。一を以て二に³応ずる時は必^{かならず}勝つ。一を一、二を二に³応ずる時は或は勝ち或は負く。一を二と行く時は^{たろま}忽ち^{まく}負る者なり。強弱・軽重・順逆・遅速・進退、何れも千刀万劍の事、其得失邪正は茲にあり。能是を考へ修行すべし。

【語注】

1) 請け…受ける意。ここでは相手の技を受ける動作をいう。本書では、この受ける動作と外す動作とを合わせて「³応ずる」と表現する。

【現代語訳】

技における優位性というのは、自分の一手で相手の二手に³応ずるところにある。たとえば打ちつつ受け、外しつつ切ること、これは一手で相手の二手に³応ずることである。受けてから打ち、外してから切るのでは、一手に一手で、二手に二手に³応ずることである。一手で二手に³応ずる時には、必ず勝つものである。一手に一手で、二手に二手に³応ずる時には、勝ったり負けたりする。(相手の) 一手に対して (自分が) 二手で攻めて行く時には、すぐさま負けてしまうものである。(技の) 強弱・軽重・順逆・遅速・進退など、どれも千刀万劍の(修練の後に身につく) 事であり、その成功・不成功、是非はこの点 (= 技における優位性をしること) にある。十分にこの点を考えつつ修行すべきである。

【補説】

相手の二手に対して、一手という記述は、二つの運動が局面融合¹⁾され一つの運動として認識されるものであり、運動の先取り²⁾がなされた運動と理解される。また、ここでいう相手の二手を一手で³応ずる代表的なわざが、相手が打撃してくるわざを打ち落としながら打撃する「打ち落とし」のわざであろう。

1) 局面融合は以下のとおり示されている。

「局面融合ということは、異なった種類の運動をスムーズに結合するのに、すなわち組合せ運動系にとって、基本的意義をもつものである。……一般に、2つの独立した運動技能をスムーズに結合させることは、終末局面と準備局面が中間局面に融合していくことに基づいているのを認めるものである。」(クルト・マイネル著、金子明友訳 (1981) : マイネル・スポーツ運動学, 大修館書店, p164)

2) 運動の先取りは以下のとおり示されている。

「先取りというのは、次につづく運動課題をめざして先行する運動局面あるいは運動経過全体がモルフォロジー的に同調を示すことである。その変容は運動の全体構造のなかにはっきりと現われるものであり、それらは客観的に明らかに確認できるものである。」(同前, p230)

第 15 章

(1)

剣刀に長短の分ち是有り。我長なる時は、体を以て利を写し¹⁾、我短なる時は、体を以て利に移る²⁾。長短、^{ひとしきどき}等則は、移写其機に因て変化すべし。雖然、渠と我と事理平等にして其得失を考ふるに、長は短を利するに過ぎず、其短は長を打に過ぎざれば不及。是其形に一得備るが故也。事は形を以て本とする利あり。故に其形に一得を備る者は、事の変化行ひ易し。変化行ひ易き時は、其利も亦自ら正し。雖然、長短は自己の手に応じ心に得るを以て是を用て可也。故に我伝に、剣刀の長短寸尺に定法なし。長は雖為利、我に応ぜざれば是を用ても全く利なし。短は不及の利たりと云ども、我是を得る時は却て利あり。故に長にして短を不欺、短にして長に不奪を、長短一味の伝授³⁾と云也。

【語注】

- 1) 写し…ここでは「敵の姿をありのままに写して攻める」の意と解する。第5章の「写」の項を参照されたい。なお現代語訳では煩瑣となるので、`攻める、とだけ訳した。
- 2) 移る…「敵の心に自己の心を移動させるようにして守る」の意と解する。同じく第5章の「移」の項を参照のこと。これも現代語訳では`守る、とだけ訳した。
- 3) 長短一味の伝授…ここと同じく、『唯心一刀流太刀之巻』事理之口伝「長短一味之事」においても、「長にして短を欺かず、短にして長に奪はれざるを、長短一味の事理を知ると云」(p291)と説明する。

【現代語訳】

(勝負に用いる) 刀剣には長短の区別がある。わが刀剣が(敵より)長い時は、体でもって有利に攻め、わが刀剣が(敵より)短い時は、体でもって有利な守りにまわる。長短が(敵と)等しい時には、攻守は臨機応変に行うべきである。そうはいつても、敵と自分とが技も道理も等しく同じと(仮定)して互いの損得を考えるに、長い刀剣は短い刀剣を制する利があるに過ぎず、短い刀剣は長い刀剣に打ちかかるしかないとすれば(距離的に)届かない。これは、刀剣の形態にそれぞれ取り得が備わるからである。技は刀剣の形態を根本とするという道理がある。よって形態に取り得が備わるものは、(その形態を利用して)技の変化を行い易い。変化を行い易い時には、その(技の)道理もまた自然と正しいのである。しかしながら、刀剣の長短は自分自身の腕にふさわしく心にかなうことで、はじめてこれを用て自分に適しているといえる。だからわが流派においては、刀剣の長短の寸法に定まった法はない。長い刀剣は利があるとはいっても、自分自身にふさわしくなければ、これを用いても全く利点はない。短い刀剣は(敵に)届かないのが道理だとしても、自分自身がこれを心得ている時には逆に利点がある。したがって長い刀剣でも短い刀剣をしのぐことができず、短い刀剣でも長い刀剣にやられないという境地を、長短一味の伝授

というのである。

（2）

然るを剣刀の長短に拘り、或は其刀を撰む心、其器に拘る時は術の本心を失ふ。我心に吹毛の利剣¹⁾を帯する者、何で刀剣に拘らんや。たとえ利剣を提ても、肉をきらざれば是鈍刀也。鈍刀を提ても、骨を砕くときは、是則利剣也。一心清静の刃を能く磨く時は、提る処の刀剣は即吹毛の剣也。是本来具足の一刀²⁾は、刹那も心身を離るゝ事無く、時に順つて殺活自在也。夫れ長は勝ち、短は負く。長短等くば一度は勝ち、一度は負く。不足には勝ち、不及に負け、相対には或は勝ち、或は負く。是理の順也。

【語注】

- 1) 吹毛の利剣…吹きかけた毛髪すら両断するほどの切れ味の剣。名刀。『碧巖録』第百則に見える語句。
- 2) 本来具足の一刀… `自然と、心中に具わった一刀、の意と解した。具足は、ここでは充分に具わった状態の意。

【現代語訳】

そうであるのに刀剣の長短にこだわり、あるいは刀剣（の善し悪し）を選ぼうとする気持ちで、道具にこだわる時には剣術の本心を失ってしまう。自分の心の中に切れ味のよい名刀を帯びている者は、どうして刀剣にこだわる必要があるだろう。たとえ名刀を持っていても、それで肉を切らないのであれば、これは鈍刀と同じである。鈍刀を持っていても、それで骨を砕くときには、これは名刀と同じである。心中に清浄の刃を充分に磨くならば、持っている刀剣は、すぐさま吹毛の名刀ともなる。この自然と、心中に具わった一刀は、一瞬たりとも心身から離れることはなく、時に応じて殺活自在（に用いることができるの）である。（しかしながら）そもそも長い刀剣では勝つ（ことが多い）、短い刀剣では負ける（ことが多い）。（互いに刀剣の）長短が同じであれば勝ったり負けたりする。（相手の力が自分よりも）足りない場合には勝ち、（自分の力が相手に）及ばぬ場合には負け、（互いの力が）等しい場合には勝ったり負けたりする。これは順当な道理である。

（3）

然るを己が分限を知らず、我堅固にして他を害せんと欲せば、是非道なり。勝負の根元は自然の理にして、是非全く計り難し。不思（思はざる）に勝、不量（量らざる）に負く。勝つべきに却て負、負くべきに全く勝ち、或は俱に死し或は俱に生ず。善にて亦不善、悪は悪にして亦悪にあらず。何に向て勝事を楽み、何れに向て負くる所を悲まんや。人間無常の習、其得失は唯天道自然の妙理也。故に敵に向ふの時、勝負の是非を念はず、一心生と死を放れて、命は天運に任せ、義を守て臆せざる時は、十万¹⁾に敵なし。敵なき時は何を以てか負けん。千刀一刀、万剣一剣の秘密²⁾也。能く是を知るは智也。能く是を行ふは勇也。智と勇と術と相兼る者を、当流剣法の明達と是を云なり。

【語注】

- 1) 十万…ここでは文意から、これを「十方」の誤りと解した。

- 2) 千刀一刀，万剣一剣の秘密…千刀万剣の修練によって体得された一撃の極意と解する。つまり敵に対しつとも勝負の勝敗を思わず，ひたすら生と死から離れ，命運は天に任せたとような心境は，千刀万剣の修練によって培われるという極意。

【現代語訳】

それなのに自分の限度を理解せず，かたくなに敵を殺したいと願うならば，これは非道である。勝負の根元は自然の理であって，(勝負の)勝敗は全く計り難い。思いもせず勝つこともあり，予想もせず負けることもある。勝つはずなのに，かえって負けることもあり，負けるはずなのに完全に勝つこともあり，あるいはどちらとも死に，あるいはどちらとも生きのこることもある。善であっても善ではないこともあり，悪は悪でありつとも悪ではないこともある。何に対して勝つことを喜び，何に対して負けることを悲しむというのか。人間無常のしきたり，その損得はただ天道の自然な妙理である。だから敵に向う時には，勝負の勝敗を思わず，ひたすら生と死から離れ，命は天運に任せて，正義を守て臆病にならない時には，どこにも敵はない。敵がない時に，どうして負けることがあろうか。これは千刀一刀，万剣一剣の秘密である。充分にこれを知るのは智である。充分にこれを行ふのは勇である。智と勇と術とを兼ね備える者を，当流剣法の明達というのである。

【補説】

刀は長短どちらが有利かという問題から，道理を心得る「長短一味の伝授」が説かれ，また順当な道理（長い方が有利）に対し，それを超えた天道に即した「千刀一刀万剣一剣の秘密」や「剣法の明達」が説かれている。このように現実的な運動の課題解決について，人間の内面の営みである精神性まで論が深化されるところにこの流派の特徴が看取される。

第 16 章

渠かれと我と分て，不思（思はざる）に來り，不量（量らざる）に去り，待つ處に不來（來らず），行く處はふせぐ。我，如此なれば渠も亦同じ。其不思所そのを打ち，其不量所にこれ応ず。其変無窮にして，其化常なし。自然の妙理を得て万機そのにこれ応ず。是を事の勝負と云也。渠と我と一心一脈にして，我思こころふ所こころを渠も思ひ，我量る處を渠も量り，動寂又唯一物にして，鏡に向て影をうつすが如し。茲に至りて，勝べき事もなく知るべきこともなし。若し勝んと欲せば即負け，不勝は又負る所なし。自然の理と云も，当然の事と云も不然。事理の有無を滅却せずんば，誰か是に勝たん。不勝は是術の本心にこれあらず。故に術を放棄して別伝の高上に至らば，何ぞ対する敵あらんや。若茲もしに來て向はんとせば自ら殺し，向て不來者は自滅すべし。是殺人刀せつじん，活人劍かつじん¹)。

【語注】

- 1) 殺人刀，活人劍…もともと『碧巖録』等に見える禅語であり，「宗師家が学人に接する場合に，奪って許さない手段が殺人刀，与えて容れる手段が活人劍である」(『禅学大辞典』)などと説明される。禅語であった，この概念を剣法上の重要なキーワードとしたのは柳生新陰流であろう。周知の通り，柳生新陰流の伝書『兵法家伝書』の上巻

は「殺人刀」、下巻は「活人剣」と名付けられている。その由来について、『兵法家伝書』は「此巻上下を、殺人刀、活人剣と名付けたる心は、人をころす刀、却而人をいかすつるぎと也とは、夫れ乱れたる世には、故なき者多く死する也。乱れたる世を治めむ為に、殺人刀を用ゐて、已に治まる時は、殺人刀即ち活人剣ならずや。こゝを以て名付くる所也」(p119)と説明する。

【現代語訳】

相手と自分とを分けて（考えて）も、考えもしないところで懸かって来たり、予想もしないところで引いたり、待ちうけているところに懸かって来なかったり、攻め懸かって行くところはふせごうとする。自分がこうであれば、相手もまた同様なのである。相手の考えもしないところを打ち、予想もしないところに反応する。その変化は尽きることなく、またその変化には定った法則もない。自然の妙理を体得してあらゆる機会に反応すべきである。これを技における勝負というのである。相手と自分とが一心一体となり、自分の考えるところを相手も考え、自分が予想するところを相手も予想し、動も静もただ一つの物ととらえ、鏡に向けて姿をうつすかのように（相手をうつすように）する。この境地に至ると、勝たねばならぬことも考えねばならぬこともない。（それでも）もし勝とうと願えば、すぐさま負け、勝とうとせねば負けることもない。（こうした境地を）自然の道理ということも、当然の技術（の結果）ということも当たっていない。事とか理とかの存在を滅却するのでなければ、誰が勝てるであろうか（いや、誰もが負ける）。（しかしながら）負けることは剣術の本意とすることではない。だから剣術（の技術的な面）を捨てて別伝の高上（の境地）に至ったならば、どうしてかなう敵があろうか（いや、誰もかかないはしない）。もしこの境地に至った者に立ち向かって攻め懸かろうとすれば、これは自らを殺すことになり、立ち向かって攻め懸かってこない者でも自滅するであろう。これを殺人刀、活人剣というのである。

ま と め

前稿に引き続き、『一刀斎先生剣法書』を現代語訳し、その技術に関する名辞の意味・内容をマイネルのスポーツ運動学の視点から考察し、以下のことが明らかにできた。

1. 勝負におけるポイントは「間」にある。この間には距離という意味とタイミングという意味との二つがこめられているが、勝負の際にこの間にばかりこだわっていると、かえって負けることとなる。
2. 鸚鵡の位という技には、相手の技に同じ技で向き合う技——例えば、面には面、小手には小手など——と、相手の技の裏をかく技——例えば面には抜き胴、小手には抜き面など——との二種がある。
3. 邪心なく、自分にふさわしい一つの剣技、一つの道理を修めることで一心不変の位に到達することができる。
4. 刀剣の長短にこだわるべきではなく、特に定まった寸法もない。心中に鋭い刀を秘めている者は、どんな刀でも相手を斬ることができる。

Summary

TAKEDA Ryuichi, NAGAO Naoshige :
Translation with notes of “Ittousai sensei kenpousyo (「一刀斎先生剣法書」)”
and some considerations from the sport pedagogic viewpoint (3)

This report is the modern translation of “Ittousai sensei kenpousyo (「一刀斎先生剣法書」)” from chapter 11 to 16, which is regarded as the precedent form of modern Kendo instructions. The authors tried to give the realistic meanings and contents to the terms and technics in the document.

- 1 . The important point of the game depends on “Ma (「間」)”. This term contains two meanings — to keep the distance against the opponent and to get a favorable timing. But too much concern with these sometimes makes you lose your game.
- 2 . The technic of “Ohmu no kurai (「鸚鵡の位」)” has two aspects — for instance “Men (「面」)” to “Men”, “Kote (「小手」)” to “Kote”, which aims at baffling the opponent and “Nuki Dou (「抜き胴」)”, “Kote Nuki Men (「小手抜き面」)”, which plays a trick on the opponent.
- 3 . “Itsushin fufen no kurai (「一心不変の位」) — which means the condition of one’s whole heartedness ” will be attained by one’s favorable sword technic and mastering a certain truth of reason.
- 4 . One should not hold a prejudice of a length and shortness of a sword, neither of its measure. If one contains a sharp sword in the mind, one will get a victory with any sword.